

書評

阿部公彦

『幼さという戦略 「かわいい」と成熟の物語作法』

仁平政人*

児童文学や若者文化などに関わる内容を予期して本書を手取るならば、そのあまりに幅広い内容にとまどうかもしれない。本書が主題とするのは、私たちが通常想定するような「子ども」や「幼さ」の問題ではなく（普通の意味での「子ども」の問題は、ごく一部で触れられるに過ぎない）、近代以降の「言葉」をめぐる、射程の大きな問題である。それは、「はじめに」で次のように示されている。「知恵と経験と力とを備えた人が、未経験で力のない人に何かを語り聞かせる」という社会の権力的な〈語りのシステム〉の裏側で、実は「支配しようとはしない言葉」（傍点原文）、すなわち未熟さ・弱さ・あやうさをもった語りが、豊かな力を持ってきたのではないか。本書における「幼さ」とは、こうした「弱い」言葉のもつ意味や力を捉えるためのキーワードだと言っていいだろう——「『幼さ』や『弱さ』を盾に取るかのようにして転覆的な力を持ってきたのが、近代の『幼さの語り』でもあった」、と。阿部氏は『文学を〈凝視する〉』（岩波書店、2012年）において、人間の「凝視」がしばしば見ることの「失敗」につながることを、そしてそうした「失敗」を通してこそ人間の「知」の成熟がもたらされてきたということを説得的に提示していたが、一見ありふれた事柄にひそむ興味深い逆説に光を当てる手腕は、本書にも鮮やかに示されていると言っていい。

本書では以上のテーマのもと、①「幼さの語り」のあり方や作用が、文学作品の読解を中心に多面的に示され、また、②近代以降の社会・文化における「幼さ」の意味（また、「幼さ」を公認してきた近代社会のありよう）が考察される。さらには、③「幼さ」の氾濫する現代社会にあって、「老い」や「成熟」がいかなる居場所を持ちうるかが、批評や小説の読解を通して問いかけられる。第二の点に関して目を向けると、近代における印刷技術の発達と「語り」の変容という巨視的レベルから、消費社会における「カウンセリング」的関係性の一般化、あるいは十九世紀以降の西洋における「キュートさ（cuteness）」の価値化などに至るまで、多様な論点が俎上に上げられる。こうした本書の議論は、「幼さ」や「未成熟性」を日本人固有の問題とするような文化論——土居健郎『甘えの構造』から近年の「かわいい」論などに至るまで——への説得的な批判とあわせて、幅広い読者にスリリングな知的刺激をもたらすものだろう。

が、本書の本領は、何よりも文学作品の言葉に対する分析（①、③）にこそある。例えば、太宰治『人間失格』に関して、その語りの不安定さ・あいまいさ・いかがわしさといった「声の弱さ」に結びつく要素が、読者にとっての「読みやすさの心地」を生み出すというメカニズムが示される（第二章）。あるいは、村上春樹の小説を特徴づける「無菌的な一対一の会話」と、カウンセリング的な物語の構図との関係が明らかにされ（第三章）、武田百合子『富士日記』のもつ独特な転覆性が、文章中に織り込まれた「読み手と書き手」の関係性を手がかりに読み解かれる（第五章）、等々。こうした分析は、いずれも作品の特徴や、読者に働きかける力の所在について、思いがけない視点から巧みに解き明かすものだ。そしてそれは、言葉の形やふるまい（「声の質」）に、またその読者との関わり方に敏感になるよ

*弘前大学教育学部

Faculty of Education, Hirosaki University

う、私たちに促すものだと言えるだろう。

本書はコンパクトながら、その問いのスケールは大きく、取り上げられる対象は（ときに「雑多」とも評されるほど）幅広い。その分、体系的な知や、明快で一義的な「結論」を求めるような読者の期待には、本書は必ずしも応じるものではないだろう。が、そもそも「決まりや知恵や価値観を伝授しようとする」権力の語りとは異なる「弱い声」をテーマとしていることを踏まえるならば、そうした期待に応えないことは、本書にとってむしろ必然的であるのかもしれない。体系性を志向するよりは多様な話題へと開かれていくような構成、また感性的な言葉を多用する柔らかなスタイルを通して、読者を問いに巻き込み、自ら考えるよう誘いかけること。そこにこそ、本書の魅力的な「戦略」があるように思われるのである。

〔朝日新聞出版 1400円〕